## (資料紹介) 嵩山房刊 五言絶句編(下)・七言絶句編(上) 『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』

#### Ш 本 佐 和 子

### 《凡例》

本稿は、 絶句」、第二冊「七言絶句」の頭書を除く本文(漢詩・仮名書き の詩解)の翻刻である 嵩山房刊『唐詩選和訓』初版三冊のうち、第一冊「五言

「五言絶句」の第一首~四三首を掲載、今号では、「五言絶句」の 紙幅の都合で、『同志社国文学』90号(二〇一九年三月発行)に

第四四首から末尾まで、及び「七言絶句」の第一首~三二首まで

を掲載する

しているため、東洋大学哲学堂文庫蔵本(寛政初版後印本、る八 用いた。ただし、「七言絶句」は、9~13丁の外側約半分が欠損 資料 ID:210193310・L24\*\*1-1108\*2、資料 ID:210193328)を 底本には、関西大学図書館中村幸彦文庫蔵本(L24\*\*1-1108\*1、

右一 T1713) で補った。

漢詩は〔〕で囲み、仮名書きの詩解は、 にした。改行は反映していない。 底本の小字双行を一行

・丁の末尾に、【】で丁数を示した(例.一丁表→【1オ】)

• 漢詩一首ごとに通し番号を私に付した。

○字体、符号、文字の用法について

漢字、平仮名は、通行の字体を用いた。

漢詩の訓点は、返り点は底本どおり、竪点は二字連結音読みのみ

に付された竪点は省略した。 を反映し、少数存する訓読み(左寄せの竪点)は省略した。詩解

詩解の振り仮名、および、仮名遣、濁点・半濁点、 り仮名、踊り字(~~・々)は底本に従った。 漢字表記と送

底本では、 句読点は全て「、」(読点)で示すため、一部を省略

陶淵明といふ人、彭澤と云処の令といふ役になりいられた、此人、 とをきと云こ、ろなり、〔彭-澤〕彭澤は陶淵明のことをいふ、昔からない。

し、そのまま「、」を用いた。

]貴重な文献の調査、 館、東洋大学附属図書館に、記して感謝申しあげます。 本研究は、JSPS 科研費 JP17K13464 の助成を受けたものです。 翻刻掲載をご許可下さいました関西大学図書

#### 翻 刻

# 《第一冊「五言絶句」つづき》

は左の小門也【13オ】 ⑭「左-掖梨-花」掖はわきといふこと也、両掖に小門が有る、是い方子-掖梨-花」を

階の天子の御まへゝ、ふきとばせばよいと、身の上をはなによせ。 \*\*\*\* うじや、〔春-風且ッ莫レ定ハ事〕春風が花を吹散すは、どちらへと云いるで、 降やうじや、〔餘香乍দ入以衣三〕花に餘た香が人の衣にうつるや常 て、天子の御前へ出て、奉公したいものじやとなり、 定りなければ、〔吹\*向言玉階二飛^〕とても飛ちるものなら玉のだ。 〔冷‐艶〕 艶 い花と云こと也〔全ヶ欺չ雪ヲ〕白い花が風で散、雪の〔冷‐艶〕 っぱっぱ はな いな

山三」号也、〔登字北-城三留-別ス〕」 ⑮「〔九-日〕重陽なり、〔陪ハッド〕従行なり、〔元-〕姓、〔魯-

・綿-連」連り、続こと也、〔滍-川〕川の名也、〔逈也〕遠く流る [香渺] 遥かな遠こと也、 〔鴉-路〕道中の名なり、

、資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』 五言絶句編(下)・七言絶句編(上) [深シ]

こで、帰去来の賦を作、退役して帰れたといふことがある、此句 がして、こきやうへ帰りたいと思やうになつたと也、魯山を陶淵 宴してたのしまれた、其【13ウ】後こきやうへ帰 たくなつた、そ 酒が好で、常に酒を飲れた、重陽はことに酒も菊もすきゆゑ、酒がけます。 いね ぎけ のま できょうこ ゑた、〔興不」浅ヵラ〕魯山と今日の酒宴がはなはだおもしろいと也、 彭澤と云は魯山のことじや、同じ令の役ゆゑ、魯山を淵明になぞらほうと、いる あぎん [臨5風ニ動3帰-心7] 風は遺風といふことで、陶淵明がのこした風

〔渺-々トシテ〕広ぐ〜としたこと、〔戌烟狐セ〕 戊烟はのろしと云こ ⑩「平蕃」曲」唐の代、蕃を平治して、帰時賀する歌なり、

明にして作た詩じや、

ひ、広ぐ、とした処に、只一処あるといふこと也、〔茫‐々トシテ〕

と、相図の烟をあぐること也、孤とは外にある陳屋は皆とりはられています。 またい まんしょう しょう しょう ないしょう しょうしょく

野の広いこと也、〔塞-〕かためて居処也、〔艸枯゚〕合戦の跡ゆへ、ののの 艸がかれたと也、〔隴-〕 蕃 境 に有、山の名なり、〔-頭〕 〔那>用シ閉サッ〕かためて居ことも入らぬ也、〔万-里不」防炒胡ッ〕

なり、 都から万里もとをく、軍兵をつかわし胡をふせぐこともいらぬと

47 「(平蕃/曲) 其二二【14オ】

嵩山房刊 『唐詩選和訓 (とうしせんききがき)』 五言絶句編 (下)・七言絶句編 (上)

胡の打入時分は、戌を処くへに置て、防然が、うだいるじだ、このはあるしました。 [平-沙独-戌間也] 横にこゑゆく の作なり、 卿「江-行無-題」江行の詩百篇有、 したものなり、江行は江の頭を行也、行くへ名高い

其中の一首也、 ゆゑに無題と

[咫-尺] 咫は八寸也、尺は十寸 也、ちかきことをいふ也、 | 医 盧山が近く、直=そこになつて登ろうとおもへば、 匡 盧山をみて 風雪雨の 〔愁ご風

ないと也、独は一処と云きみ也、〔空留二一-片/石門〕胡を平治し がねばならぬ、平治したれは、戌の軍兵も入ず、一処も番を置は

雨ご

たことを石 彫つけて其石ばかり 残 也、〔万-古在『燕-山』〕 万歳だ

の後迄燕支といふ山に石がのこるであろふとなり、

「逢戸侠-者三」侠者は男伊達といふこゝろなり、

〔燕‐趙〕燕趙とも『国の名なり、〔悲‐歌ァ士〕侠者のこと也、

ts.

燕趙の両国には侠客が有、夫で、手前を燕趙侠者に

平沙は砂漠のこと也、 を絶といふなり、

〔大-軍還』〕軍勢が帰るなり、

資料紹介〉

の棲洞が有う、 霧窟〕雲霧の窟は、仙人の棲処をいふ也、此山は名山ゆへ、仙人霧窟〕 5~4 せんじん すむしじる 〔猶ヲ有帰ヲ六朝ノ僧」〕六朝は呉、晋、宋、斉、

なんぎにあふて、〔匡-盧不」可」登ハ〕山へ登れぬ也、

、秖〈疑っ雲-

うにして居られた、いまもそのやうな、【15オ】僧がいられるであ ろふと、紙うたかふことなり、のぼりたづねたいといふこゝろなり 陳、のこと也、この六朝のじぶんは、この山に風流な僧が仙人のやき、のこと也、この六朝のじぶんは、この山に風流な僧が仙人のや

二は、一族の中で二十二番目の年也、 ⑩「秋-夜寄☆丘二-十-二-員-外心」丘は姓、員外は官

〔懐リ君ヲ属ス秋ー夜パ〕足下のことは、

常におもひくらせども、

秋<sup>き</sup>の

たふくといふこと也、行先の道も遠ひに、日がかたむきましたから、 前路は行【14ウ】先の路といふこと、日は将り、斜し、 は、日もか 夜の、ものあはれなについて、猶おもふといふ 心 也。 あるくこと也、

〔寸-心言と不」尽〕心底を噺しつくさねども、〔前-路日将に斜^ト〕

たとゑた、 かしから、

〔相に逢っ劇-孟ヵ家〕

劇孟はむかし漢の代の天下一人の

世俗軽薄にて、義がないゆへ、 夜の凉しき空ゆへ、詩を吟咏して、あちこち歩也、 〔散-歩咏云凉-天三〕散歩はあちら、こちら、

噺をする人がない、せつかくよい人にあふたゆゑ、心中を噺して、はらい Ηv 聞 -子落ツ山空は物音のせぬしづかなこと也、只松子の落音の る斗じやと也、 夜ふけて、人音もせぬことなり、

山

-空ワシテ松

秋き

〔幽-人応

世俗をためなをしたいが、としよつてよわいがないと也、

未、眠う〕 幽人は閑かなことを 好 で、隠者のやうにくらす人也、こ

は、よわひのかたむいたことにもなる也

御別もふすといふこと也、

此が

いまだねずにいられるであろうとおもふていを言つかわす也、 れは員外をさしていふ也、夜ふけものしづかなことがすきなれば、 ③「答□李-澣□」李は姓、先から贈詩に、酬答するなり、【16オ】

折柄、江の頭で笛の音を聞也、 「聴き江-笛『送記陸-侍-御『」陸は姓、侍御は官也、此人を送

送い君 引見送觴に、【15ウ】臨でわかれがかなしいにふへの遠し 〔遠ヶ聴テ江-上ノ笛ヤ゙〕江の上で笛の遠音が聞る也、〔臨ヒ瘍ニーヒ しまる、となり、

音をきくもものさびしいが、 還 て是よりあと 独 残り、〔更:向:郡 音をきけば、いとゞあはれをます也、〔還দ愁ヮ独-宿」夜〕今笛の 

こ、できくよりかなしくいやであろうと、それがおもひやられると

きをいふ、〔何」処っ〕何処かしれぬほどとをき也、〔帰-思方:悠ナル 〔故-園〕こきやうをいふなり、〔渺′〕ひろく〜としたこと、とを

哉ナ〕帰たく思も、かぎりもないと也、〔淮-南〕処の名也、〔秋

もふ、雁の音をきゝ、 は家居のこと也、秋の雨夜にて、いやましに旅が 哀 で、 帰 たくお 雨は降、一しほかへりたひ意ます也、〔高-斉聞つ雁ノ来ハッ〕高斉。 - 雨っ夜〕故郷をおもひ出して、寂莫おもふに、秋の夜のことなり、 いよく〜こきやうがなづかしいと也 ŋ 合点すればよい、

〈資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上)

くつなれは罷、〔渓-上対珍ヶ鷗二聞也〕渓川の上に行ては、鷗の [林-中観」易っ罷ヶ] 林の物しづかな処で、易経を見、さてたい

還ス〕今は何と云人が達人で、足下と詩文章のとりやりして、たのいまでは、いまでは、いまでは、これでは、これがはない。 の風俗はむかしから、詩文章の達人がをほひが、〔何-人ヵ最で往 居を友たちの様にし、しづかにたのしみ、〔楚-俗饒シ詞-客;〕楚国

函「婕妤怨」婕妤は前に見ゆ、怨の体を作る也 の居処也、そこではなやかにみへるといふことを花に寄ていふた [花-枝出ト建-章ト] 建章は宮の名也、当時御寵愛の趙飛燕と云女

いふきみ也、承見ものとはごてうあいにあふものといふことじや にみへたり、幾許長は、どのやうにすぐれて美しいぞと借に問と ふな、〔借-問ュ承以恩,者〕借に問とは、手前の心て心にとふと 〔雙- 蛾幾-許クヵ長キ〕 【16ウ】 雙蛾は 両 の眉のこと也、蛾の義は前

昭陽宮三室 篳 篥 の音がするが天子の御遊に出 御て楽があるそせららう せっちょく きょ

者ぢや、〔鳳-管〕篁のことぢや、〔発云昭-陽三〕昭陽も宮の名也、

⑤ 「題云竹-林-寺三」 盧山に有なり、 〔歳-月人-間促心〕大きに年がよつたと也、 〔烟-霞〕風景のことな

[此/地]

竹林寺のこと也、

[多少] 風景の佳中でも竹林寺に多

「不けスル事

及六石-尤-風三」石尤風は逆風のこと也、今己が酒を飲給へと留いる。 ここと しょう のう しょめ しょう

て置は、石尤風の逆風に逢様なもの者と思てくださるな、

〔慇‐勲‐ュ竹‐林‐寺〕慇懃に竹林寺の風景を見おくと也、 、資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上| 故人は朋友のこと也、此処は手前のことをいふ也、

〔更:得〕幾回過雪〕 幾度もこの地へくることもあるまひとなり

いと也、

〔返-照〕夕日景也、〔入…閭-巷二〕閭は二十五家を云、小里也、『ふのだ』

は道のこと也、さし入はてらすこと也、〔憂ィ来ァ〕憂て来たと云

うなつた、〔誰‐共ニヵ語᠈〕誰に噺で慰こともないと也、〔古‐道 こと也、秋の暮ゆへもの哀に成ていろく~とおもひ出してかなし

ŋ, 動『禾-黍『〕秋風があわのきみのといふものを、ふきうごかすばか 少三人行二人行も少いゆゑ道も古見るとなり、〔秋-【17才】風 田舎のさみしきていなり、

射の詩を、和韻する也 劒「〔和『張〕姓〔僕-射〕官也〔塞-下ノ曲『〕」前に見たり、張僕

降にまぎれて、のがれにげるそふな、〔欲トハー将トラ軽騎ー逐ムト〕手軽゚テ きこへる、〔単-于〕夷狄の君のこと也、 〔遠ク遁-逃ス〕さて是は雪

大雪で弓にも刀にも雪が満るゆへとふもならぬと也 き騎馬武者を引連追伐にしたひものなれども、〔大-雪満コ弓-刀ト〕 「別言盧秦卿三」盧ハ姓、秦卿は名也

此、夜、中〕今宵一夜でもわかれかたひと也、 〔知レトーサ有禣ヲ前ー期ノ在ザ〕後に逢時節を前より定をく也、〔難シ分レのずまです。 また また 〔無上将」が故一人ノ酒ラ

> 59「幽州」 国の名也、 〔征-伐シット〕遠国を守のつはものとなつて、〔在ヨ桑乾トi〕処の名

巷が

留たい故者と也、【17ウ】

てくるしむなり、〔慇‐懃駅‐西′路〕慇懃はねんごろのこと也、駅 

方をみやるなり、〔此去『向『長―安』〕此道を行はこきやうの長安然 は馬次也、故郷をなつかしくおもふて駅の西のかたこきやうのは馬次也、 こまでう へ帰るがはやく~かゑりたいことかなとねんごろに見やると也

ゆへ三閭廟と云也 ⑩「三閭廟」楚と云国の屈原と云人の霊廟也、三閭大夫の官で有

夫の官で有しが、賢人にて、楚王も是を尊み用られた、後讒言 ると也、〔屈-子怨"何ッ深\*〕 昔、屈原と云人は楚と云国の三閭大

〔沅‐湘流テ不レ尽キ〕 沅湘は二水の名也、 昔 より今につきずながれ

怨み【18才】られたと見ると云こ、ろ也、〔日-暮秋-風起り〕日暮 に遇て、流人となり、、遠方へ放逐れた、其時此処に身を沈めて、

方に成て寂寥折柄、秋風も吹、昔のことを思い、物哀な体をいふた。なる。このとのでは、ままで、ないである。

[蕭-々タワ楓-樹-林]紅葉楓なと有林もさびしく、哀れない。 あいましょ あいまん |思言君-恩言||宮女、君の御寵愛の、うすく成しを、うらむる体で 屈原をおもふゆゑなり、 客となり、居て、秋かぜのおとを聞旅のものあはれをますこゝろを 作るゆへ、秋風と題す

多く舞遊也、鶯がやめば蝶の舞と時節のうつるをいふなり、きょうなが すのさへつること也、 〔長-門蝶-舞多》〕長門も宮の名也、 胡蝶が

〔小-苑鶯-歌歇ヶ〕小苑は園の名、芙蓉園ともいふ、鶯歌はうくひ

也 <u>61</u>

の花さかりもさるであろうとかんじた意也、 也、春もされども、御幸もないが、そのうちには年がよつて、我身はない。 子のことになる也、 〔翠-輦〕天子の「輦」なり、翡翠の羽をもつて「飾也、翠輦と云は天 〔眼:看ぃ春又ヶ去事ヲ〕眼の前にながめて居中ニ、早春もさるとなり、 〔不二曽ヶ過で〕 天子の御幸も、さつはりないと

「登記柳-州蛾-山三」柳州は国也、蛾は山の名也、【18ウ】

故郷がなづかしさに、何方が故郷ぞとのぞみみれども、こまら 心に色~~の事をおもひ、かぎりもないなり、 [荒-山]木の葉など黄み落て、人の登もまれで、行路も別たぬ山 「秋風引」引といふも、詩の一体也、行の曲のと云類也、 〔独リ上ヶ意悠-々〕誰登人もなく、只独のことなれば、 たれの話のと 〔秋-日午也〕山に登りみれば、秋日てうど、午時じや 故郷は何方か見ず、西北の方融州のみよく見るとなり、 [如-何>望」郷処] (西-北 他だ国で

> いわんための句也、〔蕭-々トシテ〕さびしきことなり、 〔何レッ処ッ秋-風至ハ〕何処から此秋風は吹て来ぞとさびしく 哀を 〔送||雁羣で]

につけあはれなことは、気がつくゆへ、秋風も人よりさきに気がつ なつかしい、〔朝-来〕今朝からなり、 風が吹也、〔孤-客最"先"聞"之〕独旅に客となり居れば【19オ】何なず、な 旅ゆへ、あはれにさびしき二雁がねが、 羣 とをる、一入故郷 寒き 〔入戸庭-樹三〕庭の樹木に秋

なり、 〔馬嘶ケ〕馬の嘶也、〔白-日暮レ〕秋日のこと也、 〔剱鳴ヶ秋-気

⑭「鞏−路)感-懐」鞏は地の名也、道中にて秋景に感じ懐を述るのなった。 ちょう ちょう ない どうちょうしょ だいもち のぶ

き、聞ゑるといふ意なり、

もなく秋気に催され、哀になつた也、渺もかぎりなきこと也 来心。 劔も鳴やうに、秋気が催したと也、秋の夕方の凄冷きをい ふなり、〔我ゥ心ロ渺トシァ無沙際〕心が何となく、ぱつとして、際語

ふされ、おもひみだれたといふ。意なり、

〔河-上空ヶ徘-徊ハ〕河の上 にうつかりと徘徊ると也、秋気にもよ

る也、 ⑥「古別離」楽府題也、大体は夫婦の別を作る、 朋友の別にも作

[欲」別<sup>2</sup>ト牽が郎が衣で]郎とは、 男といふことなり、 衣物を持、 引き

、資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上)

なり、

<u>上</u>

嵩山房刊 『唐詩選和訓 (とうしせんききがき)』 五言絶句編 (下)・七言絶句編

かならず、臨邛へは行る、な、司馬相如のやうな者かあろうかとあ といふ女を連て、去られたことが有、其ことをいふたものしや、 勧也、〔金-屈-巵〕 巵は 杯が ⑩「勧」酒」酒をふるまふことなり、 ふ也、中華に「杯」いろく~あり、日本と同じからす、〔満酌〕一は 〔勧公君三〕君とは先の人を敬まふた語なり、勧は一つ飲給へと 也、金の曲る手把有を金屈巵といき、 かね まがれ てもきのある きんくっし

を採に山奥へ行れたと也、童子のこたゑなり、〔只在三此/山-中三〕 ⑥「尋パー隠者ヲ不」遇^」山に隠居人を尋て遭ざるなり、 にとふたなり、〔言ヮ師^〕隠者をさして云也、〔採ハ薬ッ去ハト〕薬ット 〔松-下問2童子三〕尋行しに、留主なれば松の樹の蔭に遊び居童子〔松-下問2童子三〕ないない。 -離三 人も常住不変はないもので、別れるは人生の常也、必ず -雨」 花盛をみやうと思へば多く風雨 遭てちる也、 【20ウ】一度は別るはづのものじや、こう逢てたのしむはまれな、 いに満酌也、〔不ゝ須、辞事ヲ〕辞なしにのみ給へと也、 〔人-生足心別 〔花發テ多沙風

⑥「宮中ニシテ題ス」天子、 自 宮中の様子を詠し給ふなり、 仙人などの雲の中にすむにたとへたものしや、 かしれぬといふこと、雲が深いから処がしれぬと隠者のことゆへ、 〔輦-路〕輦は天子の「輦」也、輦路とは御幸の道といふこと也、 ば、烟の立やうこみへる也、その中より波も立くる也、 五湖と云也、〔遊っ〕遊覧する也、〔烟-波〕夕方に湖上を遠くみれば、 ◎「秋-日湖-上」洞庭に遊なり、 [落-日]暮方なり、[五-湖三]洞庭湖五処へ別れ、流れるゆへに、

此山の中に居れるて有かと也、〔雲深シテ不」知レ処ヲ〕何処に居れるいます。

まづ酒でも飲でたのしむがよいとすゝむる也

きりいはれぬ意じやと、也、 押籠られ同然なり、〔憑い高何-限/意〕 御幸し給ふこともならぬと也、姦邪、 満い枝三」上林は天子の苑也、 〔生ミ秋艸ー〕艸の生繁るは御幸【20オ】もなきゆゑなり、 花の盛で枝に満て開 憂の甚しきといふこ、ろ也、 佞臣に威をとられ給ふゆへ、 高処に憑みれは、こふとか ても御遊に 〔上-林花 愁っ あろふ、世を逃たのしみに来も有べし、流人となり、来てかなし 千古事〕此湖上についてはさぞく、浮沈みいろくへの人が来みたで 見渡し処くを見に、古今のことを思ひ愁を催と也、 秋の夕暮はことさらものあはれなるに、 湖上をひろくくと、

はらぬものは東流のみなれは也 人もない、たゞ東流の水にたづね、とふよりほかはなひとなり、 か 〔打:起シテ〕打起なといふこと也、〔黄-鶯-児ワ〕 黄鶯は日本には ②「(伊州歌) 其二」

題は慈一恩一塔上」長安にあり、【21オ】

〔漢-国山-河在『〕漢の代には繁昌な 都 なればさぞ宮殿楼閣美をつ なき鳥也、鶯のことにあらず、〔莫॥教心事枝-上ニ啼つ〕 いる、黄鶯を追起て、なかしてくれるなとなり、「啼っ時キ驚シー妄ゥ

ばかりじやとなり、〔秦-陵草-樹深シ〕秦の始皇の 陵 も、秦の代 くしてあるべきが、それもかわりはて、かわらずあるものは、山川 遼 西は地の名なり、遼西へ行夫に逢夢でも見やうとおもふに、夢いらせい ち な 夢っ」啼ば 譁 すしきゆへ、夢を 驚 し覚す、〔不ら4得」到連っ遼西三〕

には美をつくした。陵であろう、今は草木がしげり有ばかりじや、 にさへ、遼西へ行れぬやうに、鳥がさますとなり、

に雲のたなびきしを、はるかに千里もみやる也、〔無言処トシテ不トン 塔の処より処々を見て、古今の変を思也、〔暮-雲千里」色〕暮方 行、大巧を立人を恵まれた人也、たいからたでひとあぐ ◎「哥-舒/歌」哥舒は姓、名は幹といふ也、此人辺鄙の夷境。

傷シッ心ッ〕世の盛衰をおもひ、愁るこ、ろからみれば、何方をみ 〔北-斗七-星高シ〕北斗七星が高く見ると也、夜更てよくよくさへ

⑦「伊-州、歌」伊州は地の名也、軍役にて伊州に在、夫をしたひの「伊-州、歌」伊州は地の名也、軍役にて伊州に在、夫をしたひ も少も油断せず刀を帯て、きつと用心して居られたなり、〔至 今二窺い牧呼ョ馬ョ〕哥舒幹は厳しく勤て、能治られたゆへ、今に しときは、格別高く見るもの也、【22オ】〔哥-舒夜帯」刀。〕夜更て

め、伊州へ軍兵をつかわしおく也、〔頻-年〕年くと同、〔不」 〔聞道ク〕聞つたへて居となり、〔黄-花-戌〕 都 から匈奴を 防 のた 臨洮は地の名也、哥舒幹を恐て、臨洮といふ処へもさつばりこぬ 到まで夷どもが馬に牧かふまでうかがふて、〔不言敢テ過言臨洮三〕

おもふ体なり

ても意をいためぬところはなひとなり、

一答り人三我を問人に、答るなり、

といふこと也

閨-裏)月〕可」憐とは愛すべきといふ意なり、遠国に別居てた 解が兵す〕合戦やまざるゆへ、甲冑兵具を解てやすまぬ也、〔可が憐ょ

営門。此月は漢家からつかわされた軍勢の上をも、この方と同じく がいにたよりをすることもならぬが、【21ウ】 〔偏:照洋ラ漢-家ノ てらすなればおなし月を見とおもふて月を愛するとなり、 〈資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上) 枕ッ石ー頭ニ眠ッ〕眠たければ石を高枕にして寝るとなり、 〔偶〈来ド〕何 意 もなく、〔松-樹/下ド〕松の樹の下に居也、 ⇒暦−日|〕山中のことゆゑ、 暦もなければ日も何かしれぬ、

五言絶句終 をしとふたものなり

春じやとおもふばかりじやと也、世をのかれた隠者で、太上古の体習。 -尽レーモ不」知ワ年ヲ〕寒が尽て、立春やら年は知ず、暖になればのまでいます。 まじゅん きょうしゅ ①「蜀中九日」蜀は地の名也、王勃蜀へ流人となり、重陽の作できる。 な かいばつよく 第章れもの てっそう ぎょ 七言絶句 流人故郷をなつかしくおもふは常なれども、佳節はいよく

したわしき懐を述る也、

〔九-月九-日望-郷-台〕望郷は隋の王秀が築かれた処也、台は、一月九-日望-郷-台」望雲です。 きゅじゅ き

ことを厭はて、帰たくくるしむなり、〔鴻-雁那ン従コ北-地」来パ] 客人の故郷へ帰を送る杯の体也、夫を見て、羨ましく一入故

\*\*でくじん こきぞう かくる きく \*\*がづか てい \*\*\* \*\* ・ ららや ・ ひとしばこ オー来ことぞと鳥によせて、都へかゑりたきおもひを述るなり、 己は北へ帰たくおもふて苦しむに、鴻雁は那に北地から南へ【1款、タピックラ 郷をおもふ也、〔人-情〕人情は余人のことにあらず、手前の意 席他-郷送が客杯〕故郷は見ずして、他の坐席で、他国から来、 〔已三厭;南-中,苦。〕蜀は都の遥か南なり、南中の蜀に居

と云ほどのこと也、前く、都に在し時は園林の花鳥を見て、楽 ②「渡川湘江」」南の方へ左遷となり、湘水を渡り、春景を見て の作なり [遅-日]春日のことなり、[園-林悲宗昔-遊っ]此 昔 の字、前〈 ばるの しょき

園林の花鳥が復て辺鄙の愁となることなり、〔独『憐』」手前独ははない。はなら、から、くんか、うれい み遊びしがと思出し悲なり、〔今-春花-鳥作云辺-愁三〕今春は

であわれむ むなり 此湘水の北へ流るゝとはかわり、南へ行を、かなしみ、いますが、また。系 〔南-竄ラレテ〕 と也、 南の方へ館られて、「不い事」似川湘-江-水ノ北-流三」 〔京-国人〕手前が京都の者なれば、てまへのこと也、 北流を羨

「贈ュ蘇-綰ノ書-記」」蘇は姓、 館は名、書記は官なり、 はんないよき くはん

翻々とすぐれたるために天子より許して〔従レ戎ニ〕辺鄙を 守 の軍 (た) しゅう (た) はり (た) 鳥の飛行する如きよき文章書と知て居となり、〔為三許ふ〕書記 鳥のひらく、飛行の意也、書記【1ウ】文章の秀俊たるをいふ也、 〔知ヌ君戎書-記本宀翩-々〕君とは蘇・綰をさしていふ也、 刷々は、

燕支山の下に年を経ず、早御帰あれと云こと也、功名を立る為と あろふと也、〔燕-支山-下〕夷狄堺の山の名也、〔莫以経い事年ョ〕 いふこゝろなり〔応ニ計ト日ヲ〕日を計、御家内が待て居らるゝでいふこゝろなり〔応ニ計ト日ヲ〕日を計、御家内が待て居らるゝで -粉〕紅粉と云ことじや、夫ゆへ、紅粉といへば女のことになる 〔楼-中〕楼とはたかどのといふ字なれども、こゝは家の中と

ならん どる役人也、美人とはほめていふなり、 ④「戯ニ贈品趙-使-君ノ美-人三」趙は姓、 この女趙使君かゝゑもの 使君は官也、 一郡を司

資料紹介〉

嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上)

て、久く居ずら、

可帰也、

旦に雲となると云た、神女のごとく、雲に映かゝやくと也、〔桃 日には雲となると云たことがある、美なること楚王のみられた、 〔紅-粉〕 前に見ゆ、〔青-娥〕 美 き 貌 といふこと也、〔映ì�楚 昔楚の襄王が神女を夢』【2才】見られた、其神女の美人がむかした。 ぜうもう しんちょ ゆめ

き花ゆへたとへたものじや、桃花の名馬、柘榴の裙でのつた処、 美に美を尽す也、〔羅-敷〕羅敷は女の名、此女、桑を摘に行しが、 花馬-〕名馬の名なり、〔上石-榴-裙〕 紅の裳也、柘榴は、あか

使君 自 婦あり、我も又東方三夫が有と言たことがある、故、 趙王是を見て、恋慕しられた、其時此女聞ず、歌を作た、其歌に、いるからは、み、れたぼ、のいかは、ままがいのでは、うだっくっ、まできた。

美人を羅敷にしたものじや、〔独『向言東-方言去言^〕羅敷が東方言のこれでは、

ことながら、他家の真似をして、恋慕したひと云こと也、使君とい る、ならば、〔謾三学示住家で作記使一君十〕他家は趙王を云也、謾な 夫があるといふたことを以て、美人も羅敷のやうこ、東方へ行きない。

ふも趙王のことになる、羅敷が歌に趙王を使君と有なり、趙王のま

⑤「銅-雀-台」魏の曹操の築られた台也、年を経、代変て、 ねをしましよと也 兵î

火などて、荒たるを見ての作なり、【2ウ】

であろふが、今は塵灰と成て果うた、〔魏-主」園-陵漳-水」浜〕 の曹操の陵園なとも荒て、 〔銅-台宮-観委巫灰-燼?〕 昔 魏の代には宮墻楼観、美を 尽 たこと 漳水の浜三有と也、 即-今西

英雄も、 や其ときの歌舞なとした、宮女どもが見たなら、さぞかなしく。 〔況ャ復ヶ当-時歌-舞ノ人ヲャ〕今見さへ、 哀 で堪られぬ、 況 いまる あまれ たく 死であのとをりになられたと、思ゑば、あはれで堪られぬ 即今西の方、園陵を望見て、曹操の智勇すぐれた。

と也、

墳、多く有処なり、はかを、あるところ ⑥「邙山」北邙山のこと也、此山、 哀『あろふと也 漢の代の陵、唐の代の名臣のない。 ないきょう よっめいしん

日本の鳥辺山と云様な処也、〔万-古千-秋対ぶ洛-城亡〕万年も古、 [北-邙山-上列:墳-堂]] 山上に墳壁が列り、ならびある 処と

陽城に対しあるとなり、〔城中日‐夕歌‐鐘起ッ〕洛陽城には日暮にまず。た 千年も春秋を経たと云言なり、久き昔を云也、此山昔から、洛thank tage へ いきには ひきし かし いき Bestari 【3オ】も歌の声や鐘の太鼓のと、なりものゝ音でにぎやかしや、

あろふ、今歌楽しむ人も、のこるものはないと、かんじたこゝろな 風の吹音がする斗で、寂寥と也、何れ一度は此山の墳壁となるでなぜ、かながは、いずいかというのない。ないかいないできない。 〔山-上惟〈聞ゥ松-柏ゥ声〕此山の上へは、只松風の音、 栢 の枝を

⑦「送訓司-馬道-士ヵ遊コョ天-台上」 此人天台山に庵をむすび居る人なり、 一司馬は姓、 道士は仙術を学 隠者ゆへ遊と言

羽人と云こと也、

仙人のこと也、

道士をさす、

司馬道士、

別に臨、白雲が処く、に飛が、是は雲に乗て行れるそふなと、 此道士の笙の音、歌の声も此地ぎりで、聞こともならぬと也、最早にの笑います。からいことものち 仙術を学ぶ人ゆへ、仙人にして云た者ちや、世にじゅっまでした。 逢ぬといふこと也、〔離-筵〕 別を送る席なり、〔数-処白-雲飛っ〕

菜【3ウ】山は仙人のすむ山で海中に有也、其名をとりて天子の宮に、 まる まのな てんし きょう きょう まる まのな 殿に蓬莱宮といふかある、蓬莱闕下といへは天子のこと也、天子もでん。ほうらいき 此道士を仙人として、作つたもの也、〔蓬-莱闕-下長ヶ相と憶と〕蓬いいって、から

桐栢山は天台山の別名也、此山へ行れたなら二度 都 へは帰られまらばがれている。 このま いか だいない 諸臣下も長くおもひしたふであろふが、〔桐‐栢‐山‐頭去ヶ不ュ帰〕

べし

⑧「送ぶ梁-六ラ」梁は姓也、

六は兄弟行の六番めといふことなる

いのこりお、ひとなり、

浮事う]毎日孤峰の湖水に浮で、有やうな景色が見るが佳景で仙 人の棲そふな山じや、足下もあの山で仙人にならるゝであろふ り洞庭湖の秋景か一望に見ると也、〔日〈『見『孤-峰水-上』 [巴-陵]地の名なり、〔一-望洞-庭/〕湖水の名也、

一々 水渺 ( ^とかぎりもなひ 【4オ】 やうにおもひ 悠 なくあひたかろまぐう 仙人に成れたら二度此方と接はし給ふまひ、〔心随:湖-水共:悠世紀、 いんかん こうじゅう まきょう [聞‐道ゥ神‐仙不ュ可ュ接ル] 其ときは日ぐ~あの湖上の山をみて、なつかしくて意が湖 聞て居が仙人は人間に接らぬと足下も

「涼州詞」涼州は辺鄙の地なり、

〔葡-萄>美-酒〕 涼 州の銘酒也、美とはよきといふことなり、〔夜-

もふ処で、琵琶の音がする也、琵琶は胡が多く馬上にて弾る楽 光、杯)玉の杯也、是も又涼州の方の西胡より制出す杯也、 、欲シシッ飲ント琵ー琶馬ー上ニ催ス〕銘酒を珠の 杯 て一盃いたそふとお

聞なから美酒を玉の杯で呑ゆへ呑る、こふのんでは酔て沙の上もき 弾する体を見て言に非す、〔酔が臥ス沙-場「君莫レ笑事〕琵琶の音を 器なる。よつて、琵琶の音がすれば、馬上に催すと言たものじや、

せぬ、皆死で果ふ也、然ば酒でも酌で楽み、愁を忘れねばなら 回り、古来から辺国へ軍に来人が、幾程回ました、大方回は ずる人に非す、広く誰でも見る人を言なり、〔古-来征-戦幾ク-人ヵ 厭わず倒れ臥すてあろふか、誰も笑てくたさるな君とは○琵琶を弾

⑩「清平調詞三首」調子のこと也、此調子古代房中の楽の遺音也、 ぬと言こと也、【4ウ】

を好み給ひ、牡丹数株を沈香亭といふ亭の前に植給ひ、花の盛に、 此詩閨房の歓楽を述るゆへに、清平調と題する也、此時玄宗、牡丹にのしています。

其時李白を召て作らせられた詩也、よつて美人の姿と花の美しきいいからない。 楊貴妃と共に御幸し給ひ、美人と美花とをならべおきたのしみ給ひ、いまり、 をとりまぜて述るゆへ、花のことをすぐに美人のすがたと作す、 、資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上)

想見はといふ意なり、〔春-風払ケ檻ヲ〕春の和気にほの〳〵 暖ターサッロンタデ なやうで、姿形は花の麗き様に想る、と也、想とは、 妙~~、筆‐も口にもつきぬ 意 あるなり 「雲ニハ想ニ衣-裳カー花ニハ想レ容カト】衣裳着は雲の軽~~とした瀟灑

な美しき花といふ事〔若シ非;章-玉-山-頭:見パ) 羣玉山は西王 みるに非んは、此様な美人をみることは有まひ、若そふでなくは、 母と云仙女の住処也、羣玉【5オ】山などて、仙女の美しいをは、いませらま、まだら、 なんきょく に、仙女の美人を見るでなふては、この美人=逢ことはなるまひと 〔会ス向で瑶-台月-下「逢〉〕瑶台も仙女の居処也、瑶台の月の夕。 檻へ風があたると言意也、〔露-華濃也〕露を含だ様=して、濃が、かぜ、いなころ。 こまぐん ぐう

①「(清平調詞) 二」

なり、この美人は人間中では見られまひと貴妃をほめたものなり、

〔一-枝濃艶露凝」香ッ〕 濃 に艶~~とした一枝衆くの花にすぐれ

程におもひ慕われたは楊貴妃三くらべては、むりに枉てしとふまじせ。 山在ヶ断-腸〕雲と成、雨と成、巫山の神女の美人を腸がとする。 其花の姿のやうな美人なりと、貴妃をたとへるなり、〔雲-雨ぎのは、すだ て、美しきが、露を含み、匂ひ篭て、こくかほる也、花を美て、

きをしたわれた様。思れると也、貴妃ならばそふ有そふなもの者 〔借-問ス〕 借と意で問て見也、 〔漢-宮誰ヵ得以似事ヲ〕漢

となり、

の代は美人が多かつたと云が、其多き中で誰か貴妃に似【5ウ】た ŋ ○但主人客をして、よく酔しむと云意也、たいいのでではない。

嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編

であろふぞ、「可」憐ら」かわ たでも似やふかとなり、 、倚ハ新ー粧ド〕可憐しい趙飛燕といふ美人が新に化粧して作りたて 趙飛燕は漢の代で第一の美人なり、 ゆらしい 〔飛-燕〕婦人の名也、 もないと、不言してあらわせり、 てたのしむと言心也、客と成、遠方に居を愁嘆かざるときは暫に 作-郷〕御主人の御蔭で酒に酔ひ、何処か知す、 〔不」知っ何ノ処ヵ是し 侘郷の愁を忘れ

〔名-花傾国両カッ相ヒ歡〕名花とは牡丹をさしていふなり、傾国と ④「峨眉山月歌」峨眉山の下に来り、 しを見て述るなり、 満月山に陰、 半分あらわれ

で、〔沈-香-亭/北倚『欄-干』)沈香亭と云御亭の北欄干に倚れ被 給ひ完爾~~笑 てみ給ふと也、〔解ス釈サッ春-風無、限恨バ〕和暖な は美人のこと也、国中の人が此人にかたぶき想といふ意で傾国と 快晴春風の限もなく吹き来も恨むる時節も有らめと悟り得た様子 〔常:得:|君-王帯が笑す看す〕花も貴妃も両ながら、常に君王の歓 歓は牡丹も貴妃も 両なから君王が 歓楽給ふと也、 其通て、天の正中へあからねばみへぬ処なり、〔思ピ君不ュ見下: wower へぬ也、 は両方が山で、正午の刻でなければ日がみへぬといふ処也、 り、〔夜發言清-溪門〕処の名也、〔向二三-【6ウ】峡下〕清溪から 〔峨-眉-山-月半-輪ノ月〕 山にかゝり、満月未だ半輪ならではみ 〔影、入が平・羌江・水に流ル〕 其影平羌江の流三入うつるな

[蘭-陵/]処の名也、[美-酒鬱-金-香]鬱金は匂ひ佳艸也、 「客-中-行」他国に居て作るゆへ客中と題す【6オ】 此る 平 羌 へうつるをみたひとおもゑども、水が急で舟が 早 ゆへ、三 

居と也、

云也、

①「(清平調詞) 三」

和人の硝子のこつぶー酒を盛ば、其色琥珀のやうに見ゆる、そのもじ、 いき 玉の器物に鬱金香を合せた美酒を盛た処、琥珀の光がする也、今にょうできょう うことこう まわ びしゅ もつ にはく ひかり 艸を煎酒に合置、飲、甚かうばし、〔玉-碗盛¬来、琥珀素 せんじょけ あわせおき のひ はなほだ 〔但〈使声主-人¬能¬酔」をヲ〕酒もよく、器もよ ラ光 によつて、西の方蜀の国へ出奔給ふ、其時蜀に都をかまへ是をによって、近りかだしまくい。まただけ、そのとばしよく、などこ ⑮「〔上-皇〕玄宗なり〔西-巡ステ〕西の方へ巡りみ給ふこと也 峡へ直行から、山を離れた満月をみずに渝州へ下ると也ます。すぐにゆくなります。まだけった。 南 - 京三】蜀の都をいふなり、〔歌二首〕」玄宗皇帝安禄山が謀反

比類なるべし、

しかれども、

御主人が上手に飲さる、ゆへ、客が大きに酔となった。

南京といふた、京都には太子が即位給ひ、是を粛宗と云た、そこ然は、

で皇帝二人ですまぬ故、蜀の玄宗を上皇と云た也、出奔給ふとはいるでいたり 言れぬゆへ、御幸の体にして、 蜀 を 巡 見給ふ 作 たなり、 閣といふなり、〔重関〕重は大そうなといふこと、関はかためとい のやう。道を作た、是を閣と云也、巌の峻きを劔にたとへて劔はない。

〔誰ゥ道ゥ君‐王行‐路難シト〕行路 難 は行路が難義で行かれぬと云こ ふことじや、〔蜀-北-門〕是が蜀の北の入口じや、門は入口とい

るを龍と云、名馬を云也、天子は六龍に駕すといふて、六匹の名 ことはなひゆへ、誰も言はせぬと云こと也、〔六-龍〕馬の八尺ない。 れぬをいふことを」、難儀で行れぬは平人のことで君王三其やうないない。 開言紫-極門)紫極は天子の位のことじや、太子が粛宗皇帝と位 安京都へ御帰といふになれば、御供の馬が雲の如く、だんぐ つゞき、おびたゝしく屯るなり、〔少-帝〕粛宗皇帝、〔長-安

とじや、此句の意は、【7オ】たれが言ふ君王の行路になんぎて行

ふこと也、〔上-皇/〕玄宗皇帝、〔帰-馬若炒雲/屯ス〕さて、玄宗長

れたれとも、そふ作られぬ也、〔地転ジー錦ー江ー成シ潤ー水ト〕錦江は こぶ、今蜀へ御幸が有ゆへ、蜀の万人が、歓といふた、実は落らいましょく みゅき きる しょく はんじん よくじょ は、万人へ下されものが有ゆへ、御幸といふ、そこで、万人がよろ へ、蜀へ御幸を西幸といふなり、〔万人歓っ〕天子の行給ふ方へ、 蜀へ御幸を 西幸 といふなり、〔万人歓っ〕 天子の行給ふ方へ 馬で車をひくなり、〔西□幸シテ〕蜀の国は京都の西南にあたるゆばくぬ# 二人の位に即給ひ、乾坤をてらし給ふこと也、 即給ひ、長安にきつとおさめて御座なさるといふこと也、〔雙ぶ懸テージット ⑰「〔聞討王姓−昌−齢名左−遷スト〕 官をおいさげ、遠国へ放れる也、 が、太平となりあきらかなと、称するなり、 乱世でくらかりし

⑯「(上皇西巡南京歌二首) 二」【7ウ】 玉-塁門 蜀に有山の名也、〔作以長-安計〕長安は山川とりまわし 長安の渭水と転ると云こと也、渭水は京都長安三有川也、〔天廻テシットですが、いすが、かち た勝れた地じや、今蜀も玉塁山と錦江と山川とりまわした勝地したりまかした勝地し 蜀の国水の名、濯り錦江といふ、転はかわると云心で、錦江がいている。 是は天から蜀を長安にしかへたといふものしやとなり、 月日が立ばかりで、故郷へ帰ることはならず、かなしひに、 ゆゑ、遥かにと言なり、 有可此一審」] 李白此時流人とて遠国に在遠方からおもひを寄する 流者なり、【8才】〔龍-標」〕処の名也、〔尉三〕官也、〔遥三統〕。 道ク〕うけたまわること也、〔龍ー標〕 龍 標尉となられ、〔過クト五 〔楊‐花落ヶ尽ヶ〕楊も花も散落てしまひ、〔子‐規啼々〕子規が啼、〔楊‐花落ヶ尽ヶ〕 をいましまります。

、資料紹介〉嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上)

たな

〔我ບ寄云愁‐心『与言明‐月こ〕

地の名也、蛮夷の居処、五渓をすぎ行る、といふことを

立たやうな高い巌が剱のごとくするどい其処三木を以て、たったが、いればっるが、

棧道のこと也、蜀は北の入口也、壁立千仭と云て、壁を ぎんとう

我もおなじく、左遷の身、常に悲しく

おもひながら、

月をみるが、足下もさぞく~かなしく思ながら、

五四

此月をみらるゝであろふ、月は同じ月を見れども、遥に別居れば、 しようもないなり、〔随『風』直『到『夜-郎』西三〕 此やうに 思と云 郎 ⑩「〔陪シッラ〕したがひゆく也、〔族-叔〕 官也、〔皣【9才】及也中-書舎-人〕官也、〔賈〕姓也、〔-父方のおぢ也、 刑

となり、

〔洞-庭〕湖水の名、〔西ニ望メト楚-江分ト〕 西の方を 望 みれば、

至己,名也、〔遊己洞-庭-湖己〕」

〔送記孟姓-浩-然力〕名也、〔之かっ広-陵上〕」地の名、 即、 句中の 图「〔黄鶴楼〕 昔、仙人来り、壁に鶴を 画 しが、羽色黄色に成、 其処二【8ウ】楼を築名とす、 もてをひろく〜とみわたせば、南天のはて迄、水のやうで雲もみへ てなきにあらず、南天の尽るまで水の様じやといふこと也、 江がわかれみゆるなり、〔水尽が南-天不」見」雲す〕水尽は、水の尽い

ぬといふこと也、初の句は西を見、此句は南を見る也、〔日落ゲ〕

ほりと烟のやう二霞しをいふ也、〔三-月下北楊州二〕花の三月、はないのでは、 なといふ心で、しりそくといふ言也、〔烟-花〕 〔故-人〕友達のこと、孟浩を差、〔西「辞パー黄-鶴-楼づ〕辞は辞退 花の時節、おん 黄昏なり、〔長-沙〕洞庭の上流の地の名なり、〔秋-色遠シク〕日昏ひくれ かたに、長沙のかたをみれば、秋の景色遠くみゆるとなり、「不」

楊州なり、

此鶴にのり、

飛行さりし処也、

の居処なり、西とは龍標をさす

ことが風にしたがひ、直に夜郎の西へ行ばよいがと也、夜郎は李白

ふこと也、〔遠-影〕遠く帆の影が見る也、〔碧-空〕 楊州へ行るゝと也、流に随ひ下へ行なり、〔孤-帆〕 孤の帆といいい。 青くと緑 0 いふ意也、此句の弔の字行弔ろふに非、遠方よりいつれか湘君のいる意味。そのようになっているというない。 廟が有ときけども、日くれゆへ遠く何処か見 弔 ふこともならぬとどう \*\*\* 知ヶ何、処ヵ弔さ、湘ー君で」湘君の事、五言にみゆ、長沙には湘君の知ヶ何、処ヵ弔さ、湘ー君で」 潜くん こき ごう

廟とみやるをいふ、みやれともしれぬとなり、

つになつて、空が水について有やうこみゆる、そこで帆影が遠くなった。 〔惟〈見ハ長-江ノ天-際ニ流事ワ〕みへぬやうになつたならば、 青空へ入やうこみへ、後はみへぬやうこなつたを尽ると言た ∞「望山天-門-山門東梁山、西梁山とて、二山両方に高の「望山天-門-山門東梁山、西梁山とて、二山両方に高 流るその風景を述るなり、 て、門をみるごとくなり【9ウ】其中をたちきつたやうに、

空をいふなり、〔尽~〕広ぐ~とみわたせば、青空と水面とがひと

そのときは、なつかしさが此長江の如く、かぎりもなひ事であろう 只此長江の天のかきりとひとつになつたやうなをみるのみであろふ、 切たやうに楚江が流ること也、 〔天-門中断シテ楚-江開ク〕 両山相対して天門のごとく、 開はながれるといふこと也、 其中を断

言から、 ながれを孤の帆掛舟がはるかにみへるが、日のそばから来やうに 景じやとなり、〔孤-帆一-片日-辺ョヮ来』〕 其面白い 両山の間は、 両岸の青く~とした山が相対して出てある、どふも絶称、佳い風。 る水が東へ流、又北の方へ廻と也、 開と遺た者也、〔碧-水東-流シテ至দ北三廻ル〕青く 〔両-岸ノ青-山相と対シテ出ッ〕 緑紫 0) な れたことがある也、其故事をあて、張翰は鱸の鱠がのぞみで、此 秋風に掛てと也、此に故事あれども 略 ス、〔此′行不」為」鱸ー魚;ホルッホザ カザ 空は葉のなきを言也、〔布-帆無シ恙掛シ秋-風ド〕布の帆を恙なく 〔自ラ愛言・名-【10ウ】山入前刻-中三〕刻は地の名也、 昔張翰といふ人、秋の比、鱸の鱠を思出、官を去帰らかしてがた。

②「早二発云白-帝-城門」蜀の国に白帝城といふ処が有、其処を 朝白帝城を辞ぞきしがもふふりかへりみ Ļ 言こと也、 ◎「蘇台覧古」呉王の建られし、姑蘇台なり、覧古は古跡をみると 自から山水を愛するから、此刻中へ行となり、

山水の名景多

し台なり、姑蘇をさす也、〔楊-柳新〕台なとは荒蕪はてたれど

- 苑〕古き園と云こと也、呉王の時の佳苑をさす、〔荒台〕

旧

も、楊柳は替らず春くれば新にめはるなり、〔菱-歌〕菱をとる者。

早く発てといふ事なり、

[朝『辞』白-帝彩-雲-間]

みへる、

いよく、佳景じやとなり、

是を聞ても舟のことなれば「暫」も止まらぬ也、〔軽-舟已:過ヶ万-一軽~~としたふねなれば、またゝきの 間 に幾重もかさな 処の名也、〔一-日ニ還ル〕舟が早て千里を一日の中といる。な 両方の岸に猿の声がする、 只今にかわらず有ものは、西江へ移る月なり、此月は、〔曽ヶ照以呉たいま を憶ゆへ、哀で春もたゑられぬと也、〔只〈今惟〈有…西江ノ月ノド」。 タータホピ セ゚ と也、清唱といふ曲もあり、〔不」勝」春三〕唱声をきけばむかし の歌也、淮南と云処の舟人も唱也、〔清-唱〕 佳き声で唱と云この歌也、淮南と云 処の舟人も唱也、〔清-唱〕 佳き声で唱と云こ

に還るなり、〔両-岸/猿-声啼ヶ不」住ラ〕

雲と云心也、【10オ】〔千-里〕遠きこと也、千の字に 拘 るべから たがと、云意也、彩雲は、いろどる雲と云字なれども、此句は只 れば、雲の間になつたと也、其処で、今朝あの雲の有処を発て来れば、雲の間になつたと也、其処で、今朝あの雲の有処を発て来

其間を往来する故、門の様也、故三門と名付、 ②「秋下ハ荊ー門ー」山の名、両山上で合て下で別、洞穴のやう也、 る山路をすぎたとなり、万の字も多きこと也、字にかゝわらず。 霜が降て、江の頭の樹も葉が落たと也、 しにかわらぬものはこればかりじやと也 - 王宮-裡、人で)昔の呉王の時の宮中の人をてらした月なり、 にしへをおもふといふこと、 ❷「越−中√懐−古」越は国の名、中はうちといふこと也、 【11オ】跡をみて、 いにしへのさかん

〔霜落ヶ荊-門江-樹空シ〕 資料紹介〉 嵩山房刊 『唐詩選和訓 (とうしせんききがき)』 五言絶句編 (下)・七言絶句編 (上)

五五

(資料紹介) 嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上)

家に帰といふから、錦衣と云たものじや、 必 錦に限ず、美きい かくの かくの からしゅ かきしょ 錦-衣〕何れも手がらをして家=帰 しゆへ、君の恩賞に 栄、よきいたから 衣服を着也、錦衣は故郷へはにしきをかざるといふことがある、 〔越-王勾-践〕王の名也、〔破ケ〕亡すと云こと也、〔呉〕 〔帰り〕平治して帰るなり、〔義-士〕忠義の、士なり、〔還」家尽シット なりしをおもひ、又、今のおとろへしをおもふなり、 国の名也 はなき時分なれども、玉笛で落梅花の曲をふく、又てまへは故 れ哀三成たと也、落梅花は 笛 のことなるべし、郭の事に非るべし、〔五月落梅花〕五月で梅花 知也、見てしるにあらず、 は玉にて製りし笛也、玉の錺の笛に非、音を聞て玉笛なる事をはまれる。 郷をおもひ、愁る意できくゆゑ、誠に梅の花が散落る様=思います。 まん まん ころ 〔江-城〕江の頭の人家多く聚 の曲の名也、

有『鷓‐鴣~飛ご)むかし勾践の時は上三句にいふとをりの盛なこ 春殿といふたもの也、春にかきるにあらず、〔只〈今惟〈 春風に入散て、洛陽城中に聞ると也、満とはよくきこへるゆへ、はあずにいまった。それができる。これである。 き夜中に聞ゑるといふこと也、【12オ】〔散ヶ入戸春-風-満戸洛-城三〕

5

花の盛と美を争ひ、春の日御殿に居と也、花のことくといふ字かは、\*\*\*\*\*・ ひょうじょ しょしょ しょ

[宮-女如ム花ッ満ミン春-殿三]宮女がおびたゝしく、

∞「春-夜洛-城聞」笛ョ」洛陽城で笛を吹をきくなり。

〔誰ヵ家ノ玉笛ソ〕 玉 笛は前二見、

[暗三飛」声引 誰が家で吹やら、暗、

衣裳のこと也、

とであろふが、歳霜を経て代かわり人かわりて、今は鷓鴣と云鳥が 洛陽城中一ぱいに聞るであろふと也、 〔此ノ夜曲-中聞ラ折-柳ラ〕

上『吹写笛』]【11ウ】 ② 「[與二史-] 姓也 飛ばかりでさみしきことかなと、感じたものなり、 〔郎-中〕官也、〔-欽〕名也、 〔聴二黄鶴楼三 情ご よく聞る故、笛の曲がはきと分る、そこで折楊柳の曲としれた、きょく。 きょく 其曲を佗国に来て居者が夜中に聞ことなれば、何人でも故い。 〔何-人ゥ不い起け故

非、故郷を玄、長沙へ行也、 〔一〕一度なり、〔為污還-客宀〕流され、他国に遷居ゆへ、客と言いないない。 [公司長-沙二]長沙は前二見、宏とは、長沙を去、外へ行に 郷をおもふ情を起ぬ者は有まいと也ます。

なり、

ŋ

故郷を思出し居処に、黄鶴楼に玉笛を吹声が聞ゑる也、こきらずをひだ。 沙の西にあたるゆへ、なつかしく望見ども、家も何もみへぬとなる。 〔黄-鶴-楼〕前に見ゆ、〔中〕うちと言こと也、 〔西-望長-安不」見」家ョ〕 〔吹言玉-笛] 長安は長で 玉とくてき 甚だ解難詩也、色~~注有ども、何れか正義と言もみへぬゆへあはなば、ときなきし、いろ きゅう 花月の遊びにのみ耽り給ひ、色におぼれ給ふをそしり諫むる意 全体此詩漢の代のことを述て、宮女の寵を羨むやうに作、せんたいのしかん。 実は君、

らましに解おく也、

詳しくは博学者に学べし、総て学問といふはくれ

をかく也、是より取つき、そろく一道の端を知よき人に逢てまなび、 ことの成【12ウ】ぬ人なとへ少しの道しるべにせんと少しの耳学問 よき師を求て学ばされば益に立ぬ也、仮名書物なとにて学問をせ んと思は大きに了見違なり、然れども博師もなく、又学問に行なり、またがくまだ。 也、是は忠臣義士には御気もつかず、女子を愛し給ふを諷する也 ŋ なづまぬがよい、外はまだ寒いとてにしきの小袖を 賜 るといふ 意 いふたもの者、公主歌舞は衛子夫也、新たには新参でといふ 意ないふたもの者、公主歌舞は衛子夫也、新たには新参でといふ 意 〔簾-外春寒シテ賜ニ錦ー袍ヤ] 簾外は只外と意得て、簾の字に

大道。いたられぬといふにも有べからず、能 〈 考へ詩意を知べたち

諷するは、風の吹様に 諌ること也、 ぎょう なぎょう いきむ

は井の上に屋根おほひのなきあらはに出して有井也、なぜ又こゝに 〔昨-夜風開ヶ露-井/桃〕昨夜の風で桃の花も開ひたと也、露井と 風景をみて憂る体を述るなり、 ◎「西宮春怨」西宮は長信宮也、大后の御殿也、班婕妤も居られた。 はいち ここん はまちょ い 処也、東宮に対して、西宮と言也、君の寵愛の衰ゑし、宮女春のといる、とうき。 たい せいきょうじょ まみ てうあい およろ こうちょはる

見は悪い也、只此二句に花も月も有て、不足なき景色をいふたものな。から、たいで、はなっと、あり、ふそく、けいと ど、こまかに言べからず、詩と云ものは、其様『字毎に義理を付て 未央宮の前の御殿高く照すといふことで、高いと言は夜更に成なべす。 まく ここだな てき 昨夜の風て桃の花が開たといふこと也、[未-央前-殿月-輪高シ] ふことが有、其文字をつかふたもので、露井に何といふ意もなひ、 露井 桃に 限 て言ぞとなれば、古人の句『桃は露井の上に生ずといっせらき』 かぎ しょ 色(一百の花が開て香が薫と也、〔欲」捲心・珠-簾門〕珠の簾を捲いる。 恨は恨めしく、愁る意也、長はましたといふ気味なり、〔斜三〕横 花見もして此様な夜は色~~面白かりしがと、うれいが長て来た也はみ いまり よいら きょう 起てきたじや、其愁は何ぞ君の御てうあひを承し時は花の春にはまう。 揚ふとおもふてと也、〔春-恨長》〕捲揚て見【13ウ】れば、、愁が尊。 〔西-宮夜静ニシテ百-花香シ〕西宮は人も来ぬゆへ、夜半毎に静

とみへる、或時帝公主の御殿へ御幸なされ、其女を御覧有て、直とみへる、或は呼ばないらしゅ ごてん みゅき れた衛子夫といふ妓女があつた、【13オ】妓女とは舞子芸者といふ やうなものじや、此女唱舞ことがよかつた、其上容貌も美かつた ことのほか御寵愛なされたことがある、 夫荒 を 非、月をみやうと空を望るなり、 は昭陽宮に隠れてみへぬと也、 〔深ゥ見ュ月ッ〕深く見るはつら~~望る也、月のすがたを見るに 〔樹-色隠タリ昭-陽|〕 樹 色 は 朧 に しゅしょく まぼろ きみを見奉らんとおもへども、昭 ( 月の出たよふニみへてゝも月 〔朧-々タハ〕月出んとする貌也

還御なされ、

武帝の姫宮のこと也、公主は姫宮といふことじや、其姫宮につかわます。

也、今伝る筝の類なり、筝を抱へなから、月を見と空を詠たる也 すじかいといふこと也、〔抱污〕抱てなり、〔雲-和ヲ〕瑟と云物の名

[平-陽/歌-舞新=承/寵ヲ]平陽は平陽公主といふて、漢の〔平-陽/歌-舞新=承/寵ヲ〕 (トルキラ - (トルキラート) が

嵩山房刊『唐詩選和訓(とうしせんききがき)』五言絶句編(下)・七言絶句編(上)

五七

がさめた、其処で疑がふなり、余に分明とみたものゆへに誠し

か夢

思つゞけて居ゆへ、君王を夢にみた也、有くくとみた処が夢

②「西宮秋怨」西宮は前に同じ、前は春の体也、是は秋の体也、 〔美-蓉〕荷の花也、〔不」及美-人/粧〕芙蓉の、奇麗なも及ばぬ、

陽宮に御座なされて見奉ることも成ぬと云心也、昭陽は宮名也、続ききのできます。

と見も佳、〔風-来-珠-翠〕翡翠と云鳥の羽でかざり、【14オ】珠も 

ゑつてうらむるといふ 意なり、 が君の御幸もなければ、むなしくなにのせんもなひことなりと、 懸き明-月ヲ待ジ君-王ヲ におほひ、 含」情はしほらしいといふような様子でといふこと也、秋扇を顔です。 此扇も秋に成て捨られたやうな身の上と成て、〔空ヶいの事を き ち ま 明月をかけたよふな身で、君王を待て居る。

色くに包ひのものがあるゆゑ也、

[却を恨る合い情を施ひと秋ー扇で]

日本ては此様なことは知ぬ、しれずとも真にと云意で可也、〔薄にはん いのち をのぶるなり、 〔真-成〕 真 にと云こと也、成の字、華人には少し義も有べけれど、 「長信秋詞」長信は宮の名也、西宮とも云也、秋詞は、秋の景色 此詩三首あり、其中の一首を選み出したるなり、

棄られて居ことも夜も昼も久く思続と也、〔夢‐見言君王ヲ覚テ後まて ついけること也、【14ウ】君の御意三人、御寵愛に遇し事と、今は 天命が薄と云義で、不仕合といふ意也、〔久々尋思ス〕思 水殿へ風が吹ば、珠翠が香しく、匂ふなり、宮女の匂ひ袋やまでん。まず、は、いまで、ちょいには、いまなり、これでは、いまない。 かざりにした帳といふて床のまわりなどにおほふものなり、〔香〕 寵恩をうけ奉るをいふなり、分て明らかにおぼへて居は複道よりできた。 たくまっ の中の事を思ひみる、うたかふゆへ也、〔分-明也〕分て明かになった。ことは、 り、〔複‐道〕廊下を二重にして上下を通るを言なり、〔奉ハ恩ッ時〕 飲了〕灯火が西宮に照 輝 て夜飲で有たとよくしつて居がと也、夢 か覚てもわからぬよふじや、〔火〕灯火なり、〔照言西-宮『知言夜』

③「青楼曲」青楼は遊女の居処を言ふなり、 も昭陽の夜飲の、ともし火が西宮をてらすととつた説もあり、 迎奉りしことをと、皆夢の中の事をおもひ疑がふて居也、いかくだまった。

〔白-馬金-鞍従『武-皇』〕武皇は漢の武帝のこと也、此詩全体漢の

か 色くつの旌を立る也、そこて旌旗と云ば御供まわりのこと。成也、なった。 代こして作た【15才】ものじや、白き馬に金の鞍を置、武帝の御は、これのいるのは、これのいるのは、これのいるのは、これのいるのでは、これののののののでは、これのいるのでは、これのでは、これのでは、これのでは、 の御ともはかりじやと言ん為こ、白馬金鞍の奇麗なを挙たる也、 供をすると也、白馬金鞍に限たことではなけれども、 

頭)」楼は青楼也、御通すじの道の遊女の在ところなり、〔少-婦〕 大勢の御供で長楊宮へ御幸なされ、御宿者といふことなり、 [十-万] 大勢の御供といふこと也、[宿以長-楊三] 長楊は宮の名、 〔楼

〔坐ス〕 筝を

とを仕て遣たことでは有、遣ねばよかつたと、夫を慕ひ悔と云を仕て遣たことでは有、遣ねばよかつたと、夫を慕ひ悔と云を仕て遣たことでは有、遣ねばよかつたと、夫を慕ひ悔と云を仕て遣たことでは有、遣ねばよかつたと、夫を慕ひ悔と云を仕て遣たことでは有、遣ねばよかつたと、夫を慕ひ悔と云を仕て遣たことでは有、遣ねばよかつたと、夫を慕ひ悔と云をかっことせ、「少-婦不」知ら愁す」未、室在の若婦は何[閨ー中]寝室の裏なり、〔少-婦不」知ら愁す〕春のことなれども、此難して作り立てと也、〔上□翠-楼二 翠は緑色のことなれども、此難して作り立てと也、〔上□翠-楼二 翠は緑色のことなれども、此難して作り立てとれば、春のことなれば、春のことなれば、春のことなれば、春のことなれば、春のことなれば、春のことなれば、春のことなれば、春のことがある、夫で夫と別て居る、恋さがまして来た也、なったがある、夫で夫と別で居る、恋さがまして来た也、なったがある、夫で夫と別て居る、恋さがまして来た也、なったながある、夫で夫と別て居る、恋さがまして来た也、なったながある、夫で夫と別では、春のことなれば能化もないないない。

意也、《つづく》